

## 輸血部と連携した学会認定・臨床輸血/自己血輸血看護師の活動報告

### —流れを止めない当院の活動—

高杉 沙織<sup>1)</sup> 境 峰子<sup>1)</sup> 尾野美沙子<sup>1)</sup> 石岡 朋子<sup>1)</sup> 佐藤真奈美<sup>1)</sup>  
一戸亜紀子<sup>1)</sup> 木村亜希奈<sup>1)</sup> 宮田 優輝<sup>1)</sup> 須郷 克子<sup>1)</sup> 前田 亜樹<sup>1)</sup>  
小山内朋子<sup>1)</sup> 原田 京佳<sup>1)</sup> 福井 朝子<sup>1)</sup> 秋田谷 栄<sup>1)</sup> 小友香奈子<sup>1)</sup>  
金子なつき<sup>2)</sup> 小山内崇将<sup>2)</sup> 内田 亮<sup>2)</sup> 亀山 光<sup>2)</sup> 齊藤 真夕<sup>2)</sup>  
玉井 佳子<sup>2)</sup>

弘前大学医学部附属病院では、2013年に学会認定・臨床輸血看護師5名が認定された。現在は、学会認定・臨床輸血看護師が15名、自己血輸血看護師が3名在籍している。活動初期は在籍部署での輸血勉強会等の個人的活動だったが、徐々に院内外での活動を展開した。2017年5月に「輸血部・輸血看護師連絡会」を発足させ、輸血部職員と輸血看護師で、インシデント情報共有や対策立案、輸血教育等について計画・実行した。新人看護師研修の講義・実技デモンストレーションを担当し、院内活動も活発になった。コロナ禍には、新人看護師研修の講義と実技を動画で作成し、翌年にブラッシュアップして提供した。コロナ禍後の現在までは、院内輸血業務の疑問点を調査し「輸血のQ&A集」を作成した。認定更新しなかった輸血看護師が10名いる一方で、毎年数名の新規輸血看護師が認定され、流れを止めることなく活動している状況を報告する。

キーワード：輸血，コロナ禍，学会認定・臨床輸血看護師，教育

### はじめに

日本輸血・細胞治療学会認定・臨床輸血看護師制度は、臨床輸血に精通し安全な輸血に寄与することのできる看護師の育成を目指して2010年に発足された<sup>1)</sup>。当院では、2013年に初めて学会認定・臨床輸血看護師が5名認定を受けた。2024年4月時点で学会認定・臨床輸血看護師が15名、学会認定・自己血輸血看護師が3名在籍している（以下、輸血看護師とする）。

認定取得当時の輸血看護師は、配属されている部署での勉強会の企画・開催等を各個人で行っていた。現在は輸血部・看護部と連携して継続的に院内の安全な輸血医療に貢献できるように活動している。

輸血看護師として10年間以上にわたり活動を継続できたのは、各個人のモチベーションを保ちつつ、チームとして活動してきた背景がある。今回は院内輸血看護師の活動内容の変遷を、活動初期、コロナ禍、現在に分類してその特徴を報告する。

### 活動状況

#### 1. 活動初期（2013年～2019年）

##### ①個人としての活動

2013年に4部署5名の学会認定・臨床輸血看護師が認定された（集中治療室、手術部、高度救命救急センター、消化器血液内科）。輸血看護師は、各自が部署の特性に合わせた内容で輸血勉強会を開催していた。集中治療室、手術部では、急に使用する血液製剤の払出方法や準備時間、大量輸血時の対応、輸血過誤防止のためのダブルチェックの重要性を、消化器血液内科では輸血セットの接続方法と輸血副反応に対する初期対応等をテーマにすることが多かった。

同年に代表者1名が院内輸血療法委員会委員となり、輸血看護に関する議題を委員会で審議する機会が増加した。翌年から、青森県合同輸血療法委員会合同輸血会議への出席、県の輸血研修会で講演等の活動をはじめた。この時期は、輸血看護師は個々のブラッシュアップや認定更新目的で研修会や学会に参加し、在籍部署での限局的な活動が多かった。

1) 弘前大学医学部附属病院看護部

2) 弘前大学医学部附属病院輸血部

連絡責任者：高杉 沙織，E-mail：momo7575@hirosaki-u.ac.jp

〔受付日：2025年3月31日，受理日：2025年10月31日〕

表1 弘前大学医学部附属病院輸血部・輸血看護師連絡会議構成メンバー（2024年3月時点）

学会認定・臨床輸血看護師	
手術部	4名
耳鼻咽喉科頭頸部外科・歯科口腔外科・麻酔科・救急科	2名
消化器内科・血液内科・免疫内科・腫瘍内科	2名
高度救命救急センター	2名
眼科・整形外科・リハビリテーション科・救急科	1名
内分泌内科・糖尿病代謝内科・脳神経内科・消化器内科・呼吸器内科・感染症科	1名
循環器内科・心臓血管外科	1名
周産母子センター	1名
化学療法室	1名
学会認定・自己血輸血看護師	
手術部	1名
高度救命救急センター	1名
産婦人科	1名

### ②同職種（院内の輸血看護師）を増やす方策

2017年5月までに、輸血看護師は18名に増加した。要因として、輸血看護について自己研鑽したいと思っている看護師が多かったこと、輸血療法委員会のなかで輸血部専任医師が輸血看護師の存在が輸血看護の安全性を高めること、日本輸血・細胞治療学会では専門知識を有する看護師の育成に力を入れていることを、院長と看護部に強くアピールして認知度をあげ、認定資格取得までは部分的に経済支援・勤務調整支援を得たこと等が挙げられる。また青森県では、青森県合同輸血療法委員会の下部組織である看護師部会が、主体で認定・輸血看護師資格試験の受験対策セミナーを約1カ月前に無料で開催しており<sup>2)</sup>、青森県内全体の輸血看護師の受験に対するハードルを低くしていることも影響していると推測する。

### ③他職種との連携：輸血部・輸血看護師連絡会の発足

院内での輸血看護師の増加を契機に、院内の輸血業務を安全かつ円滑に実施する目的で輸血部から提案があり、輸血部・輸血看護師連絡会を発足させた。輸血部・輸血看護師連絡会は、輸血部専任医師、輸血部臨床検査技師、輸血看護師で構成（表1）し、隔月で開催している。奇数月の第一水曜日17:30～と時間を決定して、勤務を調整して参加しやすいように配慮した。連絡会では、必ず過去2カ月間の輸血に関連したインシデントを共有した。共有したインシデントの対策を協議して輸血療法委員会へ報告し、院内全体に周知している。

検討した実際インシデントの例として、新鮮凍結血漿製剤の落下破損、保管方法が異なった血液製剤を一緒の容器で運搬した事例があり、対応策についてグルー

プに分かれて検討した。新鮮凍結血漿製剤の落下破損については血液製剤の取り扱いの注意点を共有し、落下破損予防のため広い台を使用しトレイの上で取り扱うこととした。保管温度が異なる血液製剤は一緒の容器で運搬しないよう再周知し、血液製剤搬送容器を輸血部で新規購入して院内一元化を図るとともに、異なる血液製剤を一緒の容器で運搬しないように注意喚起を促す写真を搬送容器上面に貼付した。また、輸血看護師活動のモチベーションを保つため、輸血看護師が持ち回りで2名の担当責任者を輸血看護師全員に割り振り、年1回以上は進行・記録係として参加が必須となるようにした。議事録は記録係が作成し、院内グループウェアで共有している。

輸血部・輸血看護師連絡会発足後、現在に至るまでの活動内容を表2に示す。

### ④院外活動への展開

2013年からは、院外活動として青森県合同輸血療法委員会活動、日本輸血・細胞治療学会学術総会発表<sup>3)</sup>などへの活動も展開した。

## 2. コロナ禍（2020年～2023年5月）

コロナ禍による行動制限等対策は、2020年2月頃よりはじまった。当院でも、対面式で看護師新人研修輸血に関する講義と実技指導などの集合研修が開催できない状況となった。輸血看護師は輸血部と協力して、動画や文書等を充実させて活動を継続した。

### ①動画作成

以前より検討されていた輸血業務の動画を作成した。内容を検討し、1)輸血部からの血液製剤の払出し、2)血液製剤の確認方法、3)医師とのダブルチェック、4)血液製剤のプライミング、5)患者確認と輸血開始時の

表2 輸血部・輸血看護師連絡会の活動

院内活動	院内で発生した輸血インシデントの共有と対応策の検討 院内輸血療法委員会でのインシデント報告と対応策の審議 新人看護師研修の講義・実技指導 中堅看護師希望者に対する輸血セミナー・実技指導 学会認定・臨床輸血看護師の1日研修の自部署の案内・説明 輸血看護の動画作成・改訂版の作成 輸血のQ&A集作成
院外活動	青森県合同輸血療法委員会参加 青森県合同輸血療法委員会看護師部会活動 青森県合同輸血療法委員会看護師部会主催・輸血セミナーの講師・事務局 日本輸血・細胞治療学会学術総会参加・発表 看護系WEB雑誌連載

注意点について当院の手順を撮影することになった。輸血看護師間で役割分担をして、シナリオの作成、撮影器材と撮影場所・マンパワーの確保、看護師役・患者役・説明者を決定した。撮影機材調達と撮影、編集は看護部教育キャリア支援センターの支援を受けた。完成した動画を輸血部・輸血看護師連絡会のメンバーで確認後に、院内限定のMicrosoft Teamsに動画をアップし、新人看護師研修をはじめ、各部署での研修や自己学習での使用を開始した。

初版動画は、全体像を撮影していた。このため、看護師の手元がみえにくく、何に注目して確認しているかわかりにくいという意見が寄せられた。そこで次年度は、看護師が作業する看護師目線の動画を作成し、看護師の手元がみえやすいように動画を改訂した。改訂版では、血液製剤確認時に製剤のどの部分を指差しているかなど実際の目線の動画を作成することができた。

### ②WEB雑誌での「連載」輸血看護を極めよう」執筆<sup>4)</sup>

2019年に、WEB雑誌(ナース専科)から「輸血看護」に関するシリーズ原稿の依頼があり、輸血看護師全員で分担して執筆し、当院の輸血認定医が執筆担当者と協議・修正して最終稿とした。本活動は、個々の輸血看護師が最新の情報や知識を再取得する良い機会になったばかりではなく、正しい文書を記載するためには正確な知識が必要であることを痛感できた。

### ③輸血業務に関する疑問・質問のアンケート調査

輸血業務は、院内輸血マニュアルに則って行うことが大原則である。しかし、輸血部・輸血看護師連絡会での活動を継続していくうちに、院内の部署間や輸血看護師間でも相違点や曖昧な点、疑問点等が明らかになってきた。また、院内の輸血業務とナーシングスキルとの齟齬・相違についての指摘がでた。このため、院内全部署の看護師に対して、日頃の輸血業務に対する質問や疑問点、部署独自のルール等のアンケート調査を行った。総数で39件の質問が寄せられ、今後Q&A集を作成することとした。

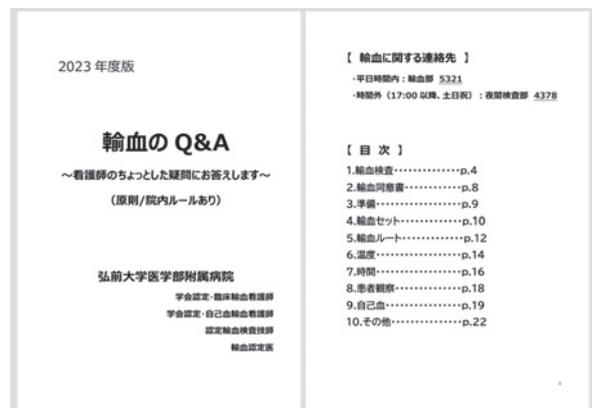


図 輸血に関するQ&amp;A集の抜粋

輸血に関するQ&A集は、院内輸血マニュアルの巻末部にファイリングし、いつでも確認できるようにした。院内紙媒体のみでの運用とし、困ったときにいつでも質問できるように、輸血部と輸血看護師の院内連絡先を記載した。

## 3. 現在 (2023年6月～)

### ①院内輸血Q&Aの作成 (院内輸血マニュアル巻末部)

アンケート調査で得られた輸血業務の疑問点を、カテゴリ別に分類した(輸血検査、輸血同意書、輸血の準備、輸血セット、輸血投与ルート、血液製剤の温度、投与時間、患者観察、自己血、その他)。輸血部医師、輸血部臨床検査技師、輸血看護師が全員で分担して、質問や疑問の回答を作成した。各々が最新の知識を再確認することで、指導に際し曖昧と感じる点や、部署独自のルールの見直しに繋がった。作成した回答集は、院内輸血マニュアルの巻末部に『輸血に関するQ&A集』(図)としてファイリングし、いつでも確認できるようにした。院内独自のルールも含まれていたため、院内紙媒体のみでの運用とした。困ったときにいつでも質問できるように、輸血部と輸血看護師の院内連絡先を記載した<sup>5)</sup>。

### ②対面式での新人看護師研修再開

コロナ禍終焉後、対面での新人看護師研修が復活し

た。輸血部臨床検査技師は血液製剤、輸血前の検査、輸血に関するインシデントなどの講義を担当した。輸血看護師は輸血の実際について総論を講義し、血液製剤プライミングのデモンストレーションを行った。コロナ禍に作成した輸血動画は院内で使用しているナーススキルに取り込み、研修前の事前学習や手順の確認に現在も使用している。

### ③中堅看護師の輸血業務再研修（希望者）

当院看護部では輸血業務・看護に関する研修会は新人看護師研修のみである。部署異動に伴い輸血業務や技術に不安がある看護師や、輸血知識のアップデートを希望する看護師も一定数存在する。そこで、中堅看護師希望者を対象に輸血研修会を2回開催した（勤務日を配慮したもので、内容は同じである）。

研修内容は、輸血部検査技師・輸血看護師の講義、血液製剤プライミングのデモンストレーションと実技、模擬血小板製剤を用いたスワーリング確認、FFP融解器の使用説明とした。新人研修と基本は変わらないが、血液製剤の期限や取り扱い等、この数年間で変更された点を重点的に講義した。実際にプライミングをしてコツを伝授されたり、外観確認のポイントが再確認できた等、研修後のアンケート結果は良好であった。また、長期間輸血業務から離れていた看護師の最新知識の確認や不安の軽減にも有用であった。

## 考 察

輸血看護師は、自らのスキルアップが目的で学会認定の資格を取得することが多い。しかし、資格取得は最終目標ではなく、資格取得後に知識を高めながら、院内・県内に安全で適正な輸血看護を提供する教育や啓発活動が重要な役割である。青森県合同輸血療法委員会は、血液製剤の安全で適切な使用推進を目的として平成18年に発足した。青森県内2次救急医療圏の中核的医療機関（医師・看護師・臨床検査技師）、行政（青森県健康福祉部医療業務課）、赤十字血液センター職員で構成されている。当院では、輸血部・輸血看護師連絡会が合同輸血療法委員会の情報を速やかに共有し、必要事項を院内（特に自部署）に周知・啓発している。この活動の継続は、院内の輸血情報をアップデートして安全な輸血業務の遂行に貢献している点だけでなく、輸血看護師個人の学会認定・輸血看護師としての活動モチベーションを保つ点でも有用であると考えられる。岩尾の報告<sup>6)</sup>にあるように、青森県合同輸血療法委員会活動や日本輸血・細胞治療学会等での他施設との交流もより活性化して情報を発信・共有していきたい。

学会認定・臨床輸血看護師資格を取得しても、更新率が低いことが注目されている<sup>6)7)</sup>。当院では、現在15名の輸血看護師が活動している一方で、延べ10名が認

定更新をしなかった。理由は、退職・転勤、産休・育休等に伴う単位取得不足、他の認定看護師資格の活動多忙に伴う輸血看護師資格更新意欲の低下等であった。ただし、離職者以外の非更新看護師は、現在でも院内の自部署における安全な輸血のための活動を継続しており、現輸血看護師との協力体制も良好である。

全国的に更新者が減少している原因については、岩尾<sup>6)</sup>は、現状の課題として、臨床輸血看護師同士で情報交換ができない、所属部署の輸血実施件数が少なくスタッフの輸血への意識が低い、診療報酬で算定されない資格は病院で重視されない、輸血認定医不在の病院では認定資格の価値が認められない、などを挙げている。これらに関しては、学会や都道府県の合同輸血療法委員会からの協力や啓発活動が重要だと考える。

このように、院内で10年間以上にわたって継続的に輸血看護師活動を継続できたのは、輸血部・輸血看護師連絡会を通じて「流れを止めずに」いろいろな活動を計画・実行できたからだと考える。今後は、院内ラウンドなどに関しても輸血部と計画し、より安全な輸血看護を提供できるよう活動を継続発展させていきたい。

著者のCOI開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

本活動報告は第72回日本輸血・細胞治療学会学術総会において発表した。

## 文 献

- 1) 日本輸血・細胞治療学会ホームページ：学会認定・臨床輸血看護師について。  
[https://yuketsu.jstmct.or.jp/authorization//clinical\\_transfusion\\_nurse/](https://yuketsu.jstmct.or.jp/authorization//clinical_transfusion_nurse/)（2025年3月現在）。
- 2) 田中一人、北澤淳一、玉井佳子、他：青森県合同輸血療法委員会の活動と役割。日本輸血細胞治療学会誌、61(1)：14—18, 2015。
- 3) 一戸亜紀子、須郷克子、宮田優輝、他：重症輸血副作用に対する現場での知識・初期対応の向上に向けた臨床輸血看護師の活動。日本輸血細胞治療学会誌、66(2)：348, 2020。
- 4) ナース専科：輸血。  
<https://knowledge.nurse-senka.jp/500214>（2025年3月現在）。
- 5) 尾野美沙子、玉井佳子、小山内崇将、他：院内ルールを含む輸血Q&Aの作成。輸血看護師と輸血部の活動報告。日本輸血細胞治療学会誌、70(2)：372, 2024。
- 6) 岩尾憲明：学会認定・臨床輸血看護師がさらに活躍するために～e-Newsの活動報告から見えてきた現状～。日本輸血細胞治療学会誌、66(4)：654—667, 2020。

- 7) 日本輸血・細胞治療学会ホームページ：学会認定・臨床輸血看護師制度都道府県別認定者数.

[https://yuketsu.jstmct.or.jp/authorization/clinical\\_transfusion\\_nurse/review\\_of\\_test\\_results/](https://yuketsu.jstmct.or.jp/authorization/clinical_transfusion_nurse/review_of_test_results/)(2025年8月現在).

## **CONTINUED ACTIVITIES OF CERTIFIED TRANSFUSION NURSES COORDINATED WITH DIVISION OF BLOOD TRANSFUSION IN HIROSAKI UNIVERSITY HOSPITAL**

*Saori Takasugi<sup>1)</sup>, Mineko Sakai<sup>1)</sup>, Misako Ono<sup>1)</sup>, Tomoko Ishioka<sup>1)</sup>, Manami Sato<sup>1)</sup>, Akiko Ichinohe<sup>1)</sup>, Akina Kimura<sup>1)</sup>, Yuki Miyata<sup>1)</sup>, Katsuko Sugo<sup>1)</sup>, Aki Maeda<sup>1)</sup>, Tomoko Osanai<sup>1)</sup>, Kyoka Harada<sup>1)</sup>, Asako Fukui<sup>1)</sup>, Ei Akitaya<sup>1)</sup>, Kanako Otomo<sup>1)</sup>, Natsuki Kaneko<sup>2)</sup>, Takayuki Osanai<sup>2)</sup>, Ryo Uchida<sup>2)</sup>, Hikaru Kameyama<sup>2)</sup>, Mayu Saito<sup>2)</sup> and Yoshiko Tamai<sup>2)</sup>*

<sup>1)</sup>Nursing Department, Hirosaki University Hospital

<sup>2)</sup>Blood Transfusion Division, Hirosaki University Hospital

### **Keywords:**

Transfusion, Covid-19 pandemic, certified transfusion nurses, transfusion education